

古事類苑

植物部十

木九

名柿
柿稱

〔本草和名十七〕柿仁譜鳥柿、鹿心柿充不食、裨楊玄操音卑、色青、已、火柿致毒、軟熟柿蘇解酒毒、出、楳子音而窕反、出崔

〔倭名類聚抄十七〕柿 說文云、柿音市、和名賀岐、赤實菓也。

〔箋注倭名類聚抄九〕段玉裁曰、言果又言實者、實謂其中也、赤中與外同色、惟柿、李時珍曰、柿高樹

大葉、圓而光澤、四月開、小花黃白色、結實青綠色、八九月乃熟。

〔日本釋名下〕柿 あかき也、其實も葉もあかき故也、

〔倭訓栞前編六〕かき略中 柿は實の赤きより名を得たるにや、葉も又紅葉す、伊勢家集に、柿の紅葉に歌をなん書たりけるといへり、爾雅翼に、柿落葉肥大可以臨書とみえたり、花鏡に此を自然

箋といへり、

〔夫木和歌抄二十九〕柿 民部卿爲家

秋くれば山の木のはのいかならんそのふのかきはもみぢまにけり

〔古今要覽稿草木〕柿

柿のもみぢは伊勢家集にみえしぞはじめなるべき、西土にても柿の霜葉を愛せるよし、酉陽雜俎花鏡等に霜葉可玩と、これ七絶の一なり、柿は實の赤きより名を得たるにや、葉も又紅葉す和訓